

TFU

No.

92

平成 30 年 3 月 20 日発行

発行所 東北福祉大学

発行者 大 谷 哲 夫

〒981-8522 仙台市青葉区国見 1 丁目 8 の 1

TEL (022) 233-3111

<https://www.tfu.ac.jp>

Newsletter

東北福祉大学通信

CONTENTS

CAMPUS TOPICS

キャリア懇談会開催

伊達政宗生誕 450 年記念歴史講座

ACTIVITY REPORT

保育キャリアデザインセミナー

INFORMATION

NEWS



2018年キャリア懇談会を東口で開催 本学と企業との相互親睦を目的にした



あいさつを述べる大竹副学長



乾杯後、打ち溶ける参加者



(株)カメイ人事管理部人事課の遠藤課長の話



キャリア教育を話す関川副センター長

宮城県内に事業所を構える企業80社を招いた2018年東北福祉大学「キャリア懇談会」が2月8日夕、仙台駅東口キャンパス5階に新設された「オリーブ・ホール」で開催されました。相互の親睦と関係強化、情報交換を目的にし、企業から主に人事担当者が、大学からは教職員と、企業を希望する3年生を含め総勢120人を超える賑やかな会になりました。

司会は本学キャリアセンターの大内真弓副センター長が務め、公務のため中国に出張中の大谷哲夫学長に代わって、大竹榮副学長が挨拶を述べました。

「本学は野球、ゴルフなどのスポーツで日本一の結果を出してきたが、それだけではない。多くの卒業生が活躍しており、卒業生夫婦がつくる宮寒梅というお酒の酒造会社もある。東日本大震災で蔵元が全壊しながらも頑張っている。頑張るのは本学の特色であり、大変ありがたいと思っている」。

「ホールの入り口に樹齢150年のオリーブの木を植えた。小豆島には樹

齢千年のオリーブ大樹がある。こだわるのは支倉常長が400年前にスペインに派遣されたなど、歴史から学び、(オリーブの)日々を学生に見てもらいたいから」と言葉に力を込めました。

総務局の福富哲也局長が乾杯の音頭を取り、歓談に移りました。入社2年目の卒業生を採用した担当者が、教員に「明るく、とてもよくやってくれる」と報告するなど、盛り上がりしました。

関川伸哉副センター長が「東北福祉大学が考えるキャリア教育」をテーマに「就業力と考える力を身につけさせ、見えにくい根っこの部分の成長を図っている」と話しました。

「東北福祉大学に期待すること」として、(株)カメイ人事管理部人事課の遠藤忠章課長が「多様な人材がいる大学だ。今まで通り核となる教育を継続してほしい」と要望しました。

最後に江尻行男センター長は「大学と企業の関係を強固なものにしたい。本日はありがとうございます」と閉会の挨拶を述べました。

全 12 回の講座日程・内容

日 程	内 容	講 師
平成 29 年 11 月 25 日 (土)	オープニング～国づくりにかけた政宗の夢～ ・今回の歴史講座の概説	佐藤 憲一 (元仙台市博物館館長)
12 月 9 日 (土)	米沢時代の伊達政宗 ・米沢城と館山城 ・伊達政宗の和戦 ・小田原参陣	菅野 正道 (仙台市博物館主幹兼学芸普及室長)
平成 30 年 1 月 20 日 (土)	岩出山時代の伊達政宗 ・岩出山城と城下町 ・豊臣政権と政宗	塩田 達也 (東北歴史博物館学芸部副主任研究員)
2 月 24 日 (土)	政宗の仙台城を掘る ・仙台城を掘る ・仙台城の建築	金森 安孝 (仙台市富沢遺跡保存館館長兼仙台市縄文の森広場館長)
3 月 24 日 (土)	城下町仙台の町づくり ・町割 (仙台の都市計画) ・杜の都 (いぐね) ・水の都 (四ツ谷用水)	菊池 慶子 (東北学院大学文学部歴史学科教授)
4 月 28 日 (土)	若林城～城下の「副都心」～ ・若林城の歴史 ・若林城の遺構	東海林 恒英 (元仙台市教育長助役、仙台市博物館館長)
5 月 26 日 (土)	現地見学 「世界農業遺産一大崎耕土の水管理システム」	—
6 月 30 日 (土)	政宗と村 ・新田開発 ・利水と灌漑	籠橋 俊光 (東北大学大学院文学研究科・文学部准教授)
7 月 28 日 (土)	慶長遣欧使節～国際交流を求めて～	平川 新 (宮城学院女子大学学長)
8 月 25 日 (土)	文化人政宗～趣味と教養～	小井川 百合子 (元仙台市博物館副館長)
9 月 22 日 (土)	政宗が育んだ“伊達”な文化 時代の先端・桃山文化の粋 (瑞巖寺・大崎八幡宮など)	濱田 直嗣 (サン・ファン・ミュージアム館長)
10 月 27 日 (土)	現地見学「貞山運河」	—

CAMPUS
TOPICS

伊達政宗生誕450年記念歴史講座

「国づくりにかけた政宗の夢」(全12回) がスタート



第1回の講師を務めた佐藤氏

11月25日、仙台駅東口キャンパスで伊達政宗生誕450年記念歴史講座「国づくりにかけた政宗の夢」が始まりました。講座は本学と河北新報社が主催、仙台市などの共催によるもので、月1回のペースで18年10月27日まで全12回行われる予定です。

開講に先立ち、共催の「心のふるさと創生会議」理事で本学特任教授の田中克人氏があいさつ。シニア層を中心とした約180人の受講者を前に「今回の講座で政宗の生きようを学んでいただき、若い方たちにも伝えていってほしいと思います」と述べました。

続いて、河北新報社・一力雅彦代表取締役社長が本学との協定に感謝しながら「(仙台駅

東口キャンパスを)教育・文化の拠点として皆さんと一緒に育てていきたいと思っています。1年間最後までよろしくお願いたします」と受講者に語りかけました。

講座の第1回は「オープニング国づくりにかけた政宗の夢」として、元仙台市博物館館長の佐藤憲一氏が講師を務め、今回の歴史講座の概説や政宗の生い立ちから人間像などについて講演していただきました。

講座は2月末時点ですべて定員に達する申し込みがあるなど、市民の方々が好評を博しています。

◇受講者の感想(一部抜粋)

「仙台人として最低限の教養を身につけたいと思います」

「政宗の人間像を再度確認できました。有意義な時間になりました」

「今回のテーマを県外の人たちに話せるようにしたい。しっかり勉強していきたいと思います。若い人たちや孫たちにも伝えたい!」

「未来へ繋げるパラスポーツ」に学生200人参加



参加者全員の記念撮影と体験学生

第2部のトークセッション（右）
模範演技（左から五十嵐、藤本、本田、萩野さん）

東北福祉大学とNHK仙台放送局との共催イベント「未来へ繋げるパラスポーツ」2020年のその先へ」が11月5日午後、福聚殿（体育館）と音楽堂けやきホールで行われました。3年後に迫る東京五輪・パラリンピックを前に、障害者スポーツの未来について考えることが目的です。

2部構成の第1部は、今年、車いすバスケットボールの日本選手権で9連覇を達成した「宮城MAX」に所属する4選手を交えての車いすバスケットボール体験&ミニ試合。一般市民のほか、本学のハンデイスポーツアドバンスチームや駒野ゼミ生、硬式野球部員ら約200人が参加しました。

4選手はいずれも卒業生で、リオデジャネイロで全日本の主将を務め、4度パラリンピックに出場した藤本怜央（平17社福卒）、本田怜（平20社教卒）、五十嵐雄也（平22社福卒）、萩野真世さん（平26社教卒）です。

藤本選手から競技ルールや動きの解説を受けながら、体験希望の学生約60

人が4グループに分かれて、車いすを体験しました。あつという間の90分。終了後、全員で記念写真を撮りました。

第2部は「Cheer Up! パラ! 障害者スポーツの未来を語ろう」をテーマにしたトークセッションで、約200人が訪れました。パネラーは「宮城MAX」の藤本さんと萩野さん、首都圏で五輪関連の活動を行う学生団体「おりがみ」の都築則彦さん（千葉大4年）と知花妃咲さん（日体大4年）、ハンデイスポーツアドバンスチームの小林倫典さん（福行3年）と若林怜さん（社福3年）、宮城県障害者スポーツ協会会長の小玉一彦教授の7人で、司会はNHKの金城均アナウンサーが務めました。

小玉教授は「障害者スポーツは自分たちが頑張ることで認知を広げられる。若い人の発信力、行動力に期待したい」とエールを送りました。最後に藤本さんから「障害者スポーツへの関わり方に答えはない。ここにいることがチャンスであり、やっていることが答えになる」と、自然体を強調しました。

ACTIVITY REPORT

学生・保育関係者ら約550人が参加

「保育キャリアデザイナー2017 in WINTER」

開催



シンポジウムで発表する学生



シンポジウムのパネリスト



総評を述べるゲスト



熱心に耳を傾ける学生たち

「TFU 保育キャリアデザインセミナー2017 in WINTER」が1月20日、国見キャンパス大教室で開催されました。総合司会は岡田早希さん（社福）、実行委員長は渡邊祐貴さん（教育）とそれぞれ3年生が務め、学生、卒業生、保育関係者約550人が参加しました。

第1部は、4年生による研究発表。テーマは「保育キャリア獲得の方法」幸せな保育者を目指して」として、昨年の先輩たちが残した「TFU 保育士・幼稚園課程 就職活動ガイドライン2016」を改良し2017年バージョンを作成した佐藤愛さん、高橋美奈さん（いずれも社福）、長谷川真由さん（子ども教育）の3人が発表を行いました。

第2部は和田明人教授がコーディネーターを務めるシンポジウム「保育者のキャリア形成と振り返りと展望」。保育職に内定した4年生で、澤田陸さん、遠藤吏香さん、稲葉奈南子さん（いずれも子ども教育）、寄松彩乃さん（社福）の4人が登壇。それぞれの学びの

振り返りと就職先決定に至るまで、そして社会人となる4月に向けての今後の課題や目標を掲げました。

また、現役保育士の寺村結香さん（2009年度子ども教育卒）が指定討論者を務め、各発表者に質問をしながらもアドバイスを送ると、発表者は壇上で真剣にメモを取りました。

最後はシンポジウムⅡとして、経済産業省大臣官房政策審議室企画官兼教育サービス室長の浅野大介氏、東京家政大学常務理事の岩井絹江氏、株式会社バトン代表取締役で本学兼任講師の林義仁氏が登壇し、総評を述べました。

浅野氏は、今後社会に出る学生たちに努力してほしい5つの項目を挙げながら、「価値観を柔軟にもってほしい。絶対」という価値観から自由な考えを持つ子どもたちを育ててほしい、岩井氏は「人生は80年ある。その人生をどう生きるか、写真真をしつかりたてていってほしい」と、それぞれ約5時間のセミナーを終えた学生たちを激励するように語りました。

仙台学長会議の代表・大谷学長 宮城県、仙台市に陳情書を手渡す

宮城県内19の国公私立大学、短期大学による仙台学長会議（代表・大谷哲夫東北福祉大学学長）が10月3日、宮城県と仙台市に「宮城県全域に通用する『通学フリーパス（仮称）』の創設に関する陳情書」を提出しました。

現在、市バス運行区域内に通う学生は「学都仙台 市バス・地下鉄フリーパス」を利用すれば格安で乗り放題になります。この度の陳情は、居住

地域や使用交通機関により生じる交通費の格差を緩和すること、また近年増加している、ボランティア活動など学外での社会貢献活動等に参加する学生たちの自己負担を減らすことも、目的としています。

この日は11校10人の学長が仙台市と宮城県庁を訪問。陳情の趣旨説明を行った大谷代表は「首都圏への学生流出を止める手段の一つ。（県全域での通学バスは）大学だけでなく、高校や中学校、小学校、幼稚園にまで及ぶもので、実現すれば全国に先駆けるものになると思います」と、期待を語りました。



陳情書を手にする代表の大谷学長（左）

庭野特任教授と土谷准教授に 平成29年度科研費審査委員表彰

本学感性福祉研究所の庭野道夫特任教授と健康科学部の土谷昌広准教授が9月29日、独立行政法人 日本学術振興会（理事長・安西祐一郎）から「平成29年度『科研費』審査委員」の表彰者として選考されました。

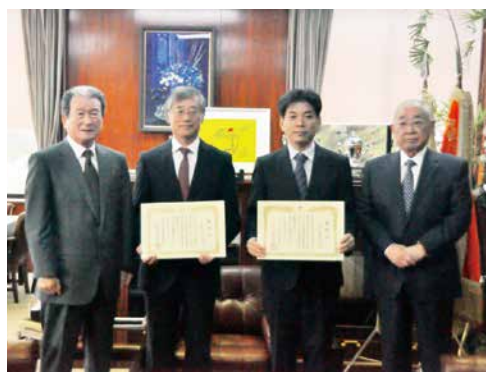
日本学術振興会は、学術研究の振興を目的に科学研究費助成事業（科研費）を行っています。科研費は書面審査と合議審査の2段階にわたって、査読審査が行われますが、その査読を務めるのが審査委員です。

平成29年度は約5,300人の書面審査委員があり、その中から255人が表彰者として選考されました。公正・公平に運営されることを旨とする科研費助成事業にあつて、有意義な審査意見を付すことのできる審査委員の役割は極めて重要であり、そうした委員の中に2人が選ばれたことは、本学にとっても大変栄誉なことでもあります。

10月18日、学長室で大谷哲夫学長から「とても素晴らしいこと」と称えられ、当振興会から届いた表彰状が授与

されました。

庭野道夫特任教授の専門はエレクトロニクス（電子工学）、土谷昌広准教授は歯科補綴（てい）学です。



大竹副学長、庭野特任教授、土谷准教授、大谷学長

東北福祉大学研究紀要第42巻

番号	タイトル	著者
1	地域福祉の対象に関する一考察	都築 光一
2	ベトナム農村部における高齢者の生活課題	後藤 美恵子
3	保育者養成課程におけるキャリア教育の課題	高野 亜紀子
4	教員養成課程における模擬授業の評価の観点に関する一考察	渡会 純一
5	大学教育における、専攻分野の進路と学士力の関係性	似内 寛
6	小学校教員養成課程におけるプログラミング教育の指導力の育成	山下 祐一郎
7	発達障害児本人への診断名告知について考える	氏家 享子
8	中高年の運動習慣者における腸内細菌叢の特徴と体組成の関連性	河村 孝幸
9	ルワンダにおける草の根技術協力事業の嚆矢	石野 莞司

仙台市と災害時協定締結 東口キャンパスを活用

東北福祉大学は11月9日、仙台市と「災害時における帰宅困難者の支援に関する協定」を締結しました。

協定は、仙台市が東日本大震災を教訓として、発災時、特に市中心部並びに仙台駅周辺で帰宅困難者を受け入れる一時滞在場所の確保のために進めているものの、すでにエスパル仙台など複数の施設が受け入れ場所となっています。

協定締結により、本学は仙台市との連携を経て、仙台駅東口キャンパスの一部を一時滞在場所として帰宅困難者約150人を受け入れます。滞在スペースだけでなく、情報提供や飲料水などの提供も行います。



協定書を手にする福富教授（右）

中国・東北師範大学から学生46人が来学

10月19日、本学と国際交流協定を結ぶ東北師範大学（中国・吉林省）から46人の学生が来学、学生との交流や坐禅などを通して文化体験をしました。

一行は外務省による日中国交正常化45周年「日中植林・植樹国際連帯事業」環境・防災・『3つの架け橋』の一環として、また、今年で友好交流都市連携30周年を迎えた宮城県と中国・吉林省が協力して行う事業の1つで、



来学した中国の東北師範大学学生と本学スタッフ

環境・防災・対日理解をテーマに来日しました。

本学では、国見ヶ丘第1、2キャンパスにある関連法人の福祉施設を視察後、国見キャンパスに到着。清水由賀講師の「社会保障論」の講義内で、本学学生120人と交流しました。

本学学生は9グループに分かれ、折り紙やけん玉、福笑いなどを用意し、東北師範大学の学生たちを迎え入れました。打ち解けるのは早く、中国語よりも英語でのやり取りが聞かれるなど、若者同士の楽しそうな姿が見られました。

その後、斉藤仙邦教授の指示の下、坐禅を体験。消灯し、薄暗くなった坐禅堂内でゆっくりと気持ちを落ち着けていました。

最後は学食風土で、宮城県主催による歓迎交流会が行われ、東北師範大学の学生は感謝の出し物を数々披露。本学にはおよそ半日の滞在となりましたが、笑顔の絶えない貴重な時間となったようでした。

河北小中学生書道展

仙台駅東口キャンパスのTFUギャラリーMini Moriで開催された「第10回河北小中学生書道展」の表彰式が11月25日に行われました。過去最多の3、430点の応募の中から、今回新設された「東北福祉大学賞」に小林花漣さん（小学生）、扇谷優花さん（中学生）がそれぞれ選出され、大竹榮副学長から賞状と記念品が授与されました。



賞状を渡す大竹副学長（左）

がそれぞれ選出され、大竹榮副学長から賞状と記念品が授与されました。



小林さんと扇谷さんの作品

第17回学内懸賞論文

平成29年度第17回学内懸賞論文の最優秀賞、優秀賞ほかの受賞者が発表され、2月21日、学内レストラン「風土」で表彰式が行われました。テーマはA部門が「体験活動○○○を通して考えたこと」、B部門が「外国人労働者の流入・受け入れについて論ぜよ」の2種類で、A部門に35編、B部門に33編の作品が寄せられました。

慎重な審査の結果、A、B部門から最優秀賞と優秀賞が各1編ずつ、佳作が2編ずつ選ばれました。表彰式後、大谷哲夫学長は「自分の言葉を使い、いい勉強になったと思う。さらに今後が大事だ」と激励しました。

なお、最優秀賞と優秀賞、佳作の受賞者は以下の通りで、最優秀賞受賞作品の要旨を紹介します。

〈最優秀賞〉

A部門Ⅱ三浦 貴裕（福祉行政3年）

B部門Ⅱ渡邊 廉樹（社会福祉3年）

〈優秀賞〉

A部門Ⅱ渡邊 晴菜（社会福祉3年）

B部門Ⅱ稲毛 渉

（産業福祉マネジメント学科4年）

〈佳作〉

A部門Ⅱ村上 夏実

（子ども教育学科4年）

私の出身は震災後、防災対策庁舎などでニュースになった宮城県南三陸町です。四方を海や山に囲まれた自然が豊かで、第一次産業である漁業が盛んな町です。今では漁業だけでなく、林業にも力を入れており、漁業・林業ともに一部で国際認証を得るなどブランド力に力を入れています。また、それ以外にもバイオマス産業に着手するなど、常に新たな挑戦をしている町です。私が中学2年の時に東日本大震災に見舞われ、始めた語り部活動によって多くの経験と出会いがありました。

その中で考え、実践してきたことがこの7年間送ってきた人生の基盤になっています。

大学3年という一つの節目の時期であるこの時期に、自身の活動の振り返りと自己分析を兼ねて「震災活動を通して考えたこと」と題して、論文を書き上げました。

語り部活動を始めたのは、高校1年生の時です。それから、今に至るまで全国各地さまざまな場所、たくさんの方々の前で語り部をしてきました。震災のことだけでなく、町の状況も話すため、常に町の状況を調べ、被災地の今”を伝えてきました。



A部門 『震災活動を通して考えたこと』 福祉行政学科3年 三浦 貴裕

する機会があったから震災を振り返り、町の状況を知ろうと、今の自分がいます。震災を経験した子どもたちにとって、震災を振り返り考える機会、震災を話す機会、その話に耳を傾ける大人が非常に大切だ、と実体験を通して感じました。

大学進学後、語り部活動の延長線で中学の友人らと始めた南三陸町学生ツアー。これまで4回実施し、延べ53名の学生が全国各地から参加しました。当初は「宮城の現状、東日本大震災を

決めたこと、自分の将来、町の未来を考えるきっかけを与えてくれたのも東日本大震災があったからです。もちろん、震災直後は今のように前向きに考えることはできないくらい、悲しみに打ちのめされ、不安の方が大きかったのは事実です。

しかし、家族をはじめ、友人、地域の大人、ボランティアなど多くの方々の支えがあったから、この約7年間の前向きに送ることができました。私が語り部活動を始めるきっかけになった

のも、震災によつて生まれた出会いがあったからです。その出会いがなければ、語り部活動はしていないどころか、町の未来を考えることもなかったように思います。

知ってもらいたい」という想いで始めたツアーも、復興が進み、町並みが変わっていく中で、本当に伝えなければならぬものは何かを考え、今では同世代に“きっかけ”を与えたいという想いに変化しました。

また、ツアーを通して考えること、学ぶこと、新たな発見もあり、自分自身が町を見つめ直す良い機会にもなっています。

私が今こうして大学生として、生活を送ることができているのは、東日本大震災があったからです。大学進学を

震災から丸7年を迎えようとしている中で、“語り部”のあり方をますます考えていかなければならない時期に來ています。後世に本当に伝えるべきことは何か、何を残していくべきか、一人の語り部として考え、活動していきたいと強く思います。また、地元、地方を盛り上げる若者の一人としても、今後の活動に一層の弾みをつけていかなければなりません。

A 部門 山本 顕信（社会福祉3年）
B 部門 川崎まゆみ（社会福祉2年）
B 部門 菊地 悠斗（福祉行政3年）



大谷学長を交えた茶話会

第5回東北福祉大学川柳

学生・教職員を対象にした第5回「東北福祉大学 川柳」の人気投票結果が発表されました。応募期間は11月15日～1月11日。審査が2月7日に行われ、次の作品が選ばれました。

▽第一席（人気投票第1位）

「夏休み 春と比べて 短すぎ」

（巨と尊・4年生）

▽第二席（同2位）

「多くしたい 夢と子どもと夏休み」

（福祉大のオールドルーキー・1年生）

▽審査員特別賞

「ロボットに 介護されそう なに話す」（たっけぼー・社会人聴講生）

日本の少子高齢化に伴う労働力人口の減少は、現在深刻な問題になっている。そして、その打開策のひとつに、外国人労働者による補填が挙げられている。しかし、我が国では住民の生活環境への不安などの理由からその定着度は低い。そこで、地域住民と外国人労働者との共生しやすい環境作りが必要であると考え。本論では、外国人労働者をその地域に住む人、すなわち生活者として捉え、地域住民と外国人労働者との共生がどうすればより良い形で実現するかについて考察する。

現在、我が国の移民や外国人労働者に対する受け入れ基準は大変厳しい。日本と周辺諸国の経済格差が縮小する中で、適正な受け入れ体制を整備しなければ、外国人労働者の確保自体が困難になると予想できる。とはいえ、現行の基準を大幅に引き下げて外国人労働者を受け入れることは、多くの人々が懸念する生活環境への悪影響が避けられず、地域住民からの理解は得られないだろう。そこで、受け入れ基準を引き下げつつ、国民の理解を得るためには、地域社会全体で、外国人と地域住民が共生できる生活環境を作ることが必要である。だからこ



B 部門 「外国人労働者に対する生活者認識からの共生コミュニティの形成」

社会福祉学科3年 渡邊 康樹

そ、今後増々、労働人口が減少していく日本社会が、より開放的で包括的に転換していくことが求められる。

現状、多くの国民は外国人労働者の受け入れには慎重だ。その最大の理由は治安悪化に伴う、自分たちの暮らしへの影響にある。このような、地域住民の外国人労働者に対する不安感を取り除くためには、外国人と地域住民が共生できるコミュニティを作ることが必要だ。最初に外国人同士でのコミュニティを作り、安心できるスペースを

外国人労働者自身の人権にも目を向けなければならぬ。一部の企業による外国人労働者に対する人権侵害は、その地域全体の衰退を招きかねない。このような差別的行為をなくすためには、外国人労働者自身や彼らに関する法や制度について幅広く理解することが重要である。また、日本で生活する外国人が年々増加していく中で、彼らの生活様式も多様化している。それは、外国人が抱える問題もより複雑になっていることを示している。だからこそ、

外国人に対して社会福祉等の専門的支援が求められている。

今後、増々日

確保する。その上で地域のコミュニティと統合していくことで、円滑に外国人と地域住民とのコミュニティを形成することができるようになる。また、多くの国民が懸念する、外国人労働者との言語コミュニケーションの不安についても地域社会の役割は重要だ。外国人労働者の日本語力の向上への取組は、雇用している企業だけではなく、地域社会全体が積極的に参加しサポートしていく必要がある。

外国人労働者の受け入れ問題は、受け入れ側の利益だけではなく、当然

この外国人労働者に対する生活者の視点と共生コミュニティの活用が日本社会全体に広がり、有効に機能することによって、外国人と地域住民との共生が安定的に実現することを願っている。

「世界防災フォーラム」に4先生が登壇 「ぼうさいこくたい」で学生が子どもたちに防災教育

東日本大震災を教訓として世界の防災

戦略を幅広く議論する「世界防災フォーラム」が仙台国際センターを主会場に11月26日から28日まで行われ、本学主催のセッションや学生出展のブース展示がなされるなど、同時に開催された「ぼうさいこくたい」を含め多くの教職員、学生が参加しました。

26日に行われたセッション「高齢・障がい（共生社会）と地域防災」は仙台市、仙台市障害者福祉協会とともに本学が主催。コーディネーター、パネリストとして本学から社会福祉学科・三浦剛教授、阿部一彦教授、産業福祉マネジメント学科・高橋誠一教授、医療経営管理学科・船渡忠男教授が登壇



セッションで登壇した先生方

しました。

約1500人の参加者らの前で、高齢者、障がい者といった災害弱者を守るためにも「連絡を取り合う地域づくりが大事」、「当事者も声を上げて改善に努めよう」など意見が上げられました。

また、大学指定団体 Team Bousaisi はブース展示に参加。1年生を中心とするメンバーが来場者に、自分たちの活動を堂々と説明しました。地下鉄東西線国際センター駅を中心に行われた「ぼうさいこくたい」



子どもたちの歓声を浴びる PASS プレゼンを行う吉成さん

では、Team Bousaisi の吉成仁紀さん（産マネ2年）が団体の取り組みとこれからの活動について、ミニプレゼンテーションを行いました。

「ぼうさいこくたい」では、ボランティアサークル「PASS」の学生たちが「防災レンジャージョー」を特設ステージで展開。小学生未満の子どもを中心に多くの歓声を浴びながら、クイズを行い、防災の啓発に努めました。PASSの学生たちは、有志のボランティア学生とともに体験型イベントとして減災カルタも行い、防災教育を実施。子どもたちを中心に好評を博しました。

参加学生の声

Team Bousaisi・吉成仁紀さん「震災を知らない子どもたちが増えてきたので、若い世代への発信力が大事。今後については、防災活動に参加してもらうために、例えばフットサルなどイベントを組み合わせていくことも提案していきたいです」

PASS・小森谷啓輔さん（教育2年）「レンジャージョーなどを通して楽しみながら防災について学んでもらうことが、この活動では大切。笑いながら学んだ防災のことが、子どもたちの頭の片隅に入ってくれば、と思っています」

実学生がXmas会

実学臨床教育プログラムを履修し、せんだんの丘で実習を行う1、2年生が12月9日～10日、利用者の皆さんにレクリエーションを行いました。

2年生の4人が中心となり企画した今回のイベント。午前、午後それぞれユニットを回り、約30分程度の時間で体操や玉入れ、また、学生手作りのカスタネットを用いながら「きよしこの夜」の合唱を行いました。元気な学生たちの姿に、利用者の方たちも笑顔が絶えませんでした。

山本和さん（福心2年）は「今年はクリスマス会をやりたいなと思い、10月から実習生同士で話し合いを重ね、準備してきました。皆さんが盛り上がってくれて、私たちも楽しかったです」と充実した表情で話しました。



サンタの帽子でXmasを演出する実学生

公立学校教員採用試験合格者の発表会

公立学校の2018年度教員採用試験の合格者による発表会が12月16日、6号館の3教室に分かれ、小学校、中高・特別支援、養護教諭の区分で行われました。発表者は区分ごとに2人ずつの計8人で、1年生から3年生までの約150人が参加しました。

発表は1人約20分。1次と2次の試験内容をはじめ、4年間のスケジュール、使用テキストを含めた勉強方法、よかった取り組み、不安や悩み、失敗、ストレスの解消法などに及びました。

発表を見守った下山忍教授は「『経験の言語化』を覚えておくように。経験が教員として、どう役立つのかを書く」といって、大西孝志教授は



合格者が一人ずつあいさつ

「願書は早めに書くように」とアドバイスを送りました。発表後は出身県に分かれ、合格

者を交えての個別相談が行われました。すり切れるほど使われたテキストを見た後輩は刺激を受けていました。

18年度の合格者は延べ106人と本学で初めて3ヶ台を記録。好調な小学校に加え、特別支援学校が過去最多を更新、養護教諭はこれまで最多の倍近くに上りました。

学生の頑張りと教職員との連携がその要因に挙げられます。この日の合格者の発表が、後輩の参考になって、学生の希望がかなうことが期待されます。

今は亡き松林先生にただ感謝の思い

地理の面白さを教わった後藤君も合格を果たす

教員採用試験受験体験発表者の中に神奈川県の高等学校地歴（地理）で見事、合格を果たした社会教育学科4年の後藤僚太君がいました。高校の地歴公民での合格は難関と言われるだけに感慨はひとしおです。ちなみに神奈川県の高校地歴の倍率はトータルで約8倍でした。

頑張った後藤君が今でも恩師と慕うのが2年次のゼミでお世話になった松林武准教授



遺品のカメラ



故松林武准教授



試験の道程を説明する後藤君

です。地理が好きだったため、理学の博士号を持つ地理の専門家・松林先生の門を、迷わずたたきました。

アウトドア派で現地調査を得意にする松林先生と旅行が大好きな後藤君にとって、まさに運命的な出会いになりました。「毎日がとても充実していました。地理に本格的に目覚めたものこの時からで、一番勉学に励みました」と、先生との出会いをかみ締めました。

先生の提案で、夏合宿は先生とゼミ生4人で後藤君の出身地である山形・酒田市に行くことになりました。ホテルに泊まり、みんなで夜通し語り合ったことが忘れられない思い出になりました。

謙虚で学生思いの松林先生が急性心臓死で急逝したのが2年次の1月1日、43歳の若さでした。にわかには信じられず、ショックでしばらくは何も

手につきませんでした。お葬式で遺族の方から教え子に先生の愛用のカメラが託されました。

カメラはニコンD700で、28mm〜300mmの望遠、単焦点レンズ付きでした。その先輩はカメラが得意でなかったため、後藤君の手元に預けられました。

4年になった4月、学内で春のフォトコンテストが開催されました。応募作品282点の中から、先生のカメラで収めた1枚が何と優秀賞に選ばれたのです。「先生が後押ししてくれたんだ」と思うと、うれしさは格別でした。

地理の面白さを教えていただいたばかりか、写真コンテストでの入選、そして、高校教員合格の道程まで導いていただいた、今は亡き恩師の松林先生には、ただただ感謝の言葉しかありません。「先生、本当にありがとうございます。先生のような人になるよう頑張りますので、天国から見守ってください。」

旅行が大好きな後藤君は松林先生の愛用カメラを携え、生徒に地理や人生を教え、時には全国を旅しながら教員生活を送るつもりです。

ルワンダでの活動を紹介する講演会

アフリカのルワンダで国際協力事業を手がけるNGO「ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」の活動を紹介する講演会「障害者が始めた障害者支援〜ゼロからのスタート ルワンダの20年を振り返る〜」が1月20日、国見キャンパスで行われました。

講師は、代表のガテラ・ルダシングワ・エマニエル氏と副代表のルダシングワ真美氏。幼少時の医療ミスで右足マヒが残るガテラ氏と、真美氏はルワンダで紛争や事故、病気で脚などを失った人のために義肢製作と無料提供を行っています。

講演はルワンダの現在の発展状況の説明から始まり、民族紛争によって最大100万人が殺害されたといわれる1994年の大虐殺についての経緯が、ガ



講師を務めたルダシングワ夫妻

テラ氏から説明されまし
た。大虐殺が最終後、ル
ワンダで暮らすよう

になった2人は、紛争の影響で体が不自由になった人を支えるためにこのプロジェクトを開始。現在は義肢製作・提供から、仕事を提供しての自立支援やスポーツを通しての支援も行っています。

昨年で活動20周年。取り組みはルワンダにとどまらず、ブルンジなど周辺国にも波及し、真美氏は「私たちから独立して、工房をやる人も増えてきた。さらに増やしたい」とさらなる自立支援を視野に入れています。

また昨年3月まで本学と共同で行った、障害者のパソコンを通した収入創出をめざしたプロジェクト「JICA草の根技術協力事業」にも触れ、「パソコン教室を継続してほしい、という声が多くあります。事業を再開するために援助が得られるようにやっていきたい」と話しました。

今後については、義足の利用者の経済的負担が減るように「健康保険で義足をつくれる制度をつくれなにか。また、技術を導入してもっと安く提供できれば、ウガンダやスーダンなど各地の紛争地域にも送れると思っています」と、期待を込めながら語りました。

Cカレンダー完成報告会

ストリートチルドレン芸術祭は1月20日、国見キャンパスでチャリティーカレンダー報告会を行いました。部長の生田目学文教授が「芸術祭の活動に、福祉大が関わってから丸10年が過ぎました。（途中から）学生中心の活動になり、大勢の方に支えられ、また学ばせてもらっています」と述べました。

続いて、学生代表の上田泰成さん（福祉3年）が完成報告を行いました。「10周年は新しいことに挑戦したいと考え、今回は2タイプつくりました」と壁掛けタイプと卓上タイプの2種類を紹介。

今年のカレンダーのテーマは「思い出」。上田さんは「自分が描くなら、今、ここで話している瞬間を描きたい。学

生代表になり、成長できた」と話しました。最後



完成報告を行う上田さん

はOGの協力で「東北の新月」の上映があり、盛会となりました。

国際問題研究会

2017年度第1回国際問題研究会は、ストリートチルドレン芸術祭と共催の特別講演会を11月1日、221教室で開き、学生や教職員ら約50人が参加しました。テーマは「バングラデシユの情勢とストリートチルドレン支援」で、国際NGOエクマツトラの共同代表である渡辺大樹氏が講師を務めました。

エクマツトラとはベンガル語で「一本の線」という意で、社会に「みんなが共有できる一本の線」を描こうとする活動団体です。バングラデシユの首都ダッカには30万人とも言われるストリートチルドレンがいて、放置できない状況にあります。

渡辺氏は日本の大学を卒業後、現地に行き、ベンガル語を勉強。滞在15



バングラデシユ情勢を語る渡辺氏

年間の活動をし、「学生の発信力を期待している」と支援を呼びかけました。

国見祭「GIFT」年に1度の贈り物」

2017 国見祭「GIFT」年に1度の贈り物」が10月21、22の両日にわたり、国見キャンパスで開催されました。台風21号が接近する悪天候の中、参加人数は2日間で約5、000人とどまりましたが、学生たちはテーマに込めた思いを精いっぱいのもてなしで実行しました。

初日のオープニングでは特設ステージ前で、合図とともに色鮮やかな風船が舞い上がりました。本学のマスコットキャラクター・福丸、福姫も登場し、色を添えました。



色鮮やかな風船が空を舞う

野外では、MUSIC FESTIVAL、フリーマーケットなどが行われ、福聚殿（体育館）では初日にバレーボール大会、大抽選会、MS・MRコンテストなど、実行委員会企画が開かれました。

けやきホール最終日はチケット完売の5人組ロックバンドMrs. GREEN APPLEのライブが行われました。



教室企画をPRする人形劇ペペ

オープニングで福丸・福姫が登場

地方創生事業「くにみ街道まつり」

地方創生事業「くにみ街道まつり」第9回が10月29日、ステーションキャンパス館内を中心に開催されました。台風22号の接近により一日中、雨が降ったにもかかわらず、地域住民や駅利用者、学生・教職員ら約3千人が訪れ、館内は賑わいました。

イベントは大きく分けて4つ。社会貢献・防災推進活動では、地域共創社会貢献フォーラムを開催し、卒業生の小林信眼さん（院生1年）が「私が思うまごのてくらぶ」と題して、特



雨の中、大勢が訪れた受付ロビー

別講演をしました。

雨のため、テント数も縮小されましたが、食関連では交流市として女川町産のサンマ（300匹）の炭火焼きコーナー、各種屋台が並び、人気を呼びました。

地域に浸透した「くにみ街道まつり」。節目の第10回になる来年が早くも楽しみになりました。



地域共創社会貢献フォーラム

好評の理学療法マッサージ

「産学官金連携フェア2018みやぎ」 大内誠、漆山、関川ゼミが出展

産学官金連携フェア2018みやぎが1月18日、仙台国際センターで開催され、情報福祉マネジメント学科の大内誠教授と漆山純一講師、社会福祉学科・関川伸哉教授がゼミの4年生たちと出展しました。

長年参加を続ける大内、漆山ゼミ生にとっては、卒業制作の発表の場でもあるこのイベント。大内ゼミでは「視覚障害者を支援するための情報機器の開発」として「段差検知システム『Rasstep』の開発」、「歩行者信号機色検出システム『Eyepass』の開発」、そして先輩ゼミ生たちも手がけてきたタイピング訓練システムをさらに進化させた「オートタイプ3」と3作品を出展しま



大内誠ゼミ

した。

漆山ゼミは「福祉支援アプリケーションの試作」として「聴覚障害児向け助詞学習アプリ」、「バランスWiiboardを用いた高齢者転倒予防ソフト」の2作品を展示しました。

大内ゼミの飛田楽々子さん（情マネ4年）は「学内の友だちかゼミ内で発表はしているが、外部の方に評価してもらおう絶好の機会。気づかなかった意見が多かった、すごく勉強になりました」、漆山ゼミの坂本航さん（情マネ4年）も「先生からも意見を頂いていましたが、また異なる目線からのコメントをいただき、改善点が分かりました」と、一般の方々からの質問や意見が勉強になった、と口をそろえま



漆山純一ゼミ

した。

2年連続の参加となった関川ゼミは地元企業・団体と共同開発した「高齢者福祉施設特化型車椅子PS-1」を、販路拡大も視野に入れて展示しました。「4月から福祉用具の会社で働くので、自分から『出展に行きます』と手を挙げました。他の会社の出展も見られて、大変いい経験になりました」と関川ゼミの伊藤賢太郎さん（社福4年）。

間もなく社会に飛び出す学生たちにとって、大きな学びの場になりました。



見学者に説明する学生



関川伸哉ゼミ

ケアニン無料上映会

本学の卒業生・加藤忠相氏（平9卒）が運営する小規模多機能型居宅介護施設をモデルにした映画「ケアニン」の無料上映会が10月16日から3日間、6限の時間帯に、音楽堂けやきホールで開催されました。上映時間は1時間45分で、3日間で約750人が鑑賞。

初日は学生や教職員合わせて約350人が参加。ホール中央から後席、2階席にかけて、ほぼ一杯になりました。映画は新人の介護職員と認知症を患う利用者とその家族とのこころの交流を描いた物語で、随所に加藤氏が施設で実践している精神が表れています。

6月17日に全国各地で公開され、今年男子は「認知症がテーマなので関心があつ



3日間で約750人が鑑賞した上映会

た。とてもいい映画だと思

鈴木康夫教授に仙台市から功労者表彰



仙台市から表彰される鈴木教授（左）

産業福祉マネジメント学科の鈴木康夫教授が11月8日、仙台市から産学連携功労者として表彰されました。

鈴木教授は今年3月まで仙台市地域連携フェローを務め、農業や食品分野のスペシャリストとして地場産業の発展に尽力したことが、この度の表彰となりました。

この日に市内で行われた「仙台市産学官連携フォーラム」において、仙台市・石川浩史経済局長から表彰状を授

かった鈴木教授は「賞を賜り、大変恐縮です。今後ますますお役に立てるよう、努力を重ね、精進していきたいです」とあいさつを述べました。

現在も仙台市地域連携アドバイザーとして活躍している鈴木教授は、2017年4月から本学教授に着任。ゼミ学生とともに「三陸ナマコ」の多用途商品開発推進事業や、キャベツ根を茶葉として活用するプロジェクトで障害者就労支援事業などと「農福連携」を図るなど、精力的な活動を続けています。

TeamZEROに感謝状

本学学生サークル「地域安全安心ボランティアTeamZERO」が1

月16日、仙台北警察署から感謝状を授与されました。日頃から警察の業務運営に協力し、防犯活動などで活躍している点が認められ、表彰されました。

学生代表の菊地真希さん（福行3年）は「TeamZEROは平成19年度（2007年度）に設立し、10周年を迎える年に名誉な賞をいただきました。防犯活動や交通安全運動を通し、地域の安全安心に貢献できることを非常に嬉しく思います。今後も地域と連携し、活動していきたいです」と語りました。

なお、TeamZEROでは、地域への防犯教室や交通安全教室など、子どもや高齢者向けの出前講座を行っています。

柴田理瑛助教の共同研究にマツダ財団から助成金

福祉心理学科・柴田理瑛助教が代表として取り組む共同研究「東日本大震災後の被災地における子どもの心身状態に関する研究」が、このほど公益財団法人マツダ財団（広島県安芸郡）から、第33回（2017年度）マツダ研究助成（青少年健全育成関係）に選出されました。

10月18日、国見キャンパスを訪れたマツダ財団・明木英昌事務局長代

理から、柴田助教と共同研究者の宮城学院女子大学教育学科・足立智昭教授、東北文化学園大学保健福祉学

科・平野幹雄教授に贈呈書が手渡されました。

研究は、大規模災害後、中長期にわたって子どもの精神的健康を悪化させることに着眼し、子どもの発達に関する研修会やワークショップを被災地の保育士や教諭らと行いながら2019年度まで調査を進め、発達段階に応じた子どもの心の支援に結びつけるというもの。

今回、助成の青少年健全育成関係部門で採択された6件のうち、成果への期待が審査員から最も高かったと明か



贈呈書を受け取る柴田助教（右）

された柴田助教は「実践と調査を同時に行っていく研究は珍しく、評価されないかもしれない、と思っていました。本当に今後の励みになります」と話しました。



感謝状を手にする
菊地さん（左）と小針さん

スクールソーシャルワーク教育課程

履習生11人が気仙沼で最終実習

社会福祉学科で「スクールソーシャルワーク（SSW）教育課程」を履修する一期生の3年生11人（男子6人、女子5人）が2月13日、14日の両日、気仙沼市教育委員会で、最終段階にあたる実習（見学実習）に臨みました。

初日は学校教育課長の熊谷利治氏が「市には27の小中学校があり、教育と福祉の接点を模索し、取り組んでいる。（SSWが）困っている子どもの立場に立てるよう願っている」とあいさつを述べました。



阿部教授が司会したシンポジウム

シンポジウムは、元中学校校長で気仙沼子どもの心のケアハウス、スーパーバイザーの小松康男氏と現職のSSW5人、本学の竹ノ内章代准教授、小野芳秀特任准教授をパネリストに、進行役は阿部正孝教授が務めました。

はじめに小松氏は

SSWの歴史に触れ、「学校は独特な世界で、SSWの立場から福祉の視点を入れて教育にあたれるのがいい。チームで取り組むことが必要」と協働を強調しました。

元中学教頭のSSWの方は「不登校は子ではなく親の問題でもある。親にゆとりがなくなった」と話し、子が話しかけても返事をしない親の例を挙げ、「子が傷つく。安心できる場所がなくなる」と懸念を表しました。

2日目は唐桑小学校の小松英紀校長から「宮城県におけるSSW拡充への取り組み」をテーマに、SSWの配置や育成、教育に関わる経緯と資格取得を目指す学生への期待などを伺いました。2日間にわたり、学生は熱心にメモを取り、質問するなど、仕上げにあたる実習を果りのあるものにしました。



教育委員会がある建物前で

「業界について学ぼう」

法務省仙台矯正管区編を開催

1～3年生が対象の講座「業界について学ぼう」は12月14日、法務省仙台矯正管区から2人の講師の方にお越しいただき、少年鑑別所と少年院の業務、仕事のやりがいについてお話いただきました。

終了時間は定刻を過ぎ、午後7時30分。開始から1時間40分の間、講師の方々の軽妙ながら胸に刺さる濃厚なお話が、受講した学生たちの心をグツと引きつけていました。



仕事のやりがいを語る講師

矯正心理職として働く講師の方からは少年鑑別所について、法務教官として働く講師の方からは少年院についてと、それぞれ業務と仕事のやりがいを説明していた。実体験を交えた話が、目に浮

かぶような語り口で展開されました。

学生たちからも「職場の男女比は」「今の仕事で良かったこと、つらいことは」「この仕事に就くために努力すべきことは。また、向いている人は」などと活発な質問が出されました。講師からは、少年たちと接する中で自らが学んでいくことや、人員構成や待遇面についても実態に即した話をしていただきました。

最後に、少年たちの誰一人として同じ個性の人間はいないと説き、『自分が正しい』と思っている、相手は別の『正しい』という意見をぶつけてくる。だから『自分が正しい』と考えるのを諦めるために、あらゆる知識を吸収する。柔軟で独りよがりにならず、分からないということを抱えながらもつと相手を分かろうとする努力ができる人が、この仕事に向いているかもしれないと、深い言葉でまとめた。

終了後も、個別に質問する学生の姿が見られるなど、大変意義のある講座になりました。

平成29年度OB・OGセミナー開催 福祉・医療編と企業・公務員編に分かれ

キャリアセンターでは12月2日と9日にステーションキャンパス館で「平成29年度OB・OGセミナー」を開催しました。2日は「福祉・医療編」、9日が「企業・公務員編」で、両日合わせて約250人の1、2、3年生が参加、OB、OGの皆さんから貴重なお話をいただきました。



福祉・医療編に参加したOB・OG

講師を務めたOB・OGは



企業・公務員編のOB・OG

さまざまな職種や分野で活躍する方たちです。セミナーは、各日とも30分×3回のフリートークで、学生たちは自分の興

「福祉・医療編」では社会福祉士、支援員、介護職、医療ソーシャルワーカー（MSW）、精神保健福祉士（PSW）など、「企業・公務員編」では市役所、銀行、商社、保険、メーカーなどで

味がある分野を選んで先輩が待つブラスへと足を運びました。先輩たちの今の業務の話や会社・団体についての説明を受けた後は「学生時代はどんな活動をしていたか」、「必要な資格は」、「就活をどのようにスタートさせたか」など、それぞれ活発に質問する姿が見られました。

講師の方たちからは「就活は自分のためにやる。どんな大人になりたいか考えていることが生きてくるし、働く中でも役に立つ」、「面接を受ける中でいろいろな企業の話を聞いて、新しく気づくこともある。楽しんで就活をやってほしい」などと、参加した3年生を中心とする学生たちを鼓舞するような言葉をいただきました。

内定学生との座談会

10月11日と19日の2日間、3年生以下の学生を対象に「内定学生との座談会Ⅰ・Ⅱ」を実施しました。今年、企業や公務員などに内定した4年生たちを招き、これから進路を決めていく学生たちに向けてアドバイスをしてもらいました。

司会のキャリアセンター職員が「先輩たちの話を聞きながら、自分に合う就活の進め方はどういう方法がいいのか、考えてほしい」と話し、講座はスタート。面接のできごとや、試験対策や勉強についての成功事例、失敗談などを聞き、参加した学生は内定獲得の秘訣を得ることができたようです。



事業所の担当者から感想を聞く学生

2017年度インターンシップ報告会が11月15日、ステーションキャンパス館で開催されました。「インターンシップ」

「同Ⅱ」を履修する2、3年生70人のほか、受け入れ先の事業所、団体の方、教員と来年度履修を考えている学生たちら計130人が参加しました。開会に先立ち、キャリアセンター・江尻行男センター長が「勉強になったこと、感動したこと、それらを報告の中で思い切りぶつけ、新たなステップに進んでほしい。頑張つて」と激励しました。

報告会は2グループに分かれ、代表の学生25人が発表。司会や運営も、履修学生たちが務めました。事業所を選んだ動機や活動内容、そして活動を通して学んだことや自身への課題を述べ、報告をまとめました。

「やりがいを持って働くことの価値を感じた」、「失敗は挑戦した証しと気づかされた」などインターンシップを経験して得たものの大きさを、それぞれが感じたままに伝えていました。



アドバイスを送る内定学生

平成29年度保健看護学科宣誓式

「一生懸命学んで」と柏木学科長が期待

11月8日、国見キャンパスで「平成29年度保健看護学科宣誓式」が行われ、1年生81人が出席しました。

宣誓式は、11月からの「基礎看護学実習Ⅰ」で、実習先で初めて患者を担当することになり、それに先立ち、1年生が看護学生として学ぶ決意を固め、真摯に学んでいくことを宣誓する機会として行っています。



1年生が勢ぞろいした看護宣誓式

柏木誠学科長は式辞で「実習で一生懸命学んで、人間としてもステップアップしてほしい。（この宣誓式で）ちゃんとしたナーズになるのだ、という志を固めてほしい」と思いますが、学生たちにも期待を込めながら話しました。

学生を代表し、佐藤昂希さんが誓いの言葉を述べました。「私たちは、人々の尊い命に携わる者としての自覚を持ち、一人ひとりの生命の尊重に努めます。これからよりたくさんの知識や技術を身につけ、社会に貢献できる看護職者になることを誓います」と力強く宣言しました。

続いて、来賓代表として黒川病院・瀧島美紀副院長兼看護部長から祝辞を、社会福祉学科・斉藤仙邦教授からは講話をいただきました。また、看護系教員祝辞として杉山敏子教授が「自分の心に誓いを立てていただきたい。皆さんの成長を心から楽しみにしています」と学生たちを激励しました。

最後に、飛塚舞美さん、三浦佳奈さんが感謝の言葉を述べながら「看護はチーム医療です。仲間を信じ、ともに支え合いながら、自分がめざす看護職者を仲間とともに探求していきたい。4年後、81人が1人も欠けることなく、夢を実現できるように頑張っていきたいと思います」と未来への期待を語り、式は無事に終了しました。

阿部芳久教授の最終ゼミ

障害児・者教育を専門にする教育学部の阿部芳久教授が3月末に定年退職になることから2月11日、ステーションキャンパス館で最終ゼミナールに臨みました。教え子約110人が北海道や兵庫県から駆けつけ、在学生を含めた参加者は約150人に上り、教室は熱気に包まれました。



白熱した講演を行った阿部教授

最終ゼミは2年前に起きた津久井やまゆり園殺傷事件を導入部に、障がい者を含む人間すべてが持つ「個人の尊重」をキーワードに挙げました。また、ボランティアをする人、受ける人の相互関係が障害児・者と周囲の人たちとの関係と類似しているとし、「それだけでなく価値がある」と強調しました。白熱した講演は予定時間を超えました。

が、惜しみない拍手と、最後は教え子から花束、記念品が贈られました。

混声合唱定期演奏会

東北福祉大学混声合唱団の第46定期演奏会が12月23日、本学の音楽堂けやきホールで開催されました。今年度のスローガン「全力疾走」を締める集大成として、市民や学生、教職員ら約400人が参加しました。

3ステージ編成の1では、第69回全日本合唱コンクール参加曲の課題曲と自由曲を力強く歌いました。指揮は石川浩、伴奏は伊藤真奈美でした。

2は「青春」と題して、団員が高校生の制服姿で登場。男女で3曲、男性、女性に分かれて1曲ずつ、計5曲を熱唱しました。3では混声合唱曲集「光と風をつれて」を情感込めて歌いました。



今年度の集大成を披露する混声合唱団

団長の椿陽介さん（社福3年）は「今後は50周年プロジェクトに向け、進みます」と抱負を話しました。

学内インフォメーション

3月27日から在校生ガイダンス

教務部教務課

◆3月に卒業される皆さんへ
卒業おめでとうございます。皆さんの今後の活躍を祈念します。

卒業後に卒業証明書や成績・資格証明書などの各種証明書が必要な場合は、申込を郵送と窓口で取り扱います。郵送の場合は、「各種証明書申込用紙」「手数料」「返信用封筒」「返信時の送料」を併せて、本学教務部教務課へ送付してください（各種申込用紙は本学ホームページからダウンロードが可能）。なお、大学院に係わる証明書は、大学院事務室において対応しています。

◆建学の精神の具現化のために

本学は、地域社会との新たな関係の構築を目的に、「地域共創」の理念を掲げています。ここでは、多くの自治体と協定を結び、地域資源を活かした学びの場を用意しています。その一つが「地域共創実学教育」です。本教育プログラムでは、さまざまな活動を行いつつながら、地域の豊かな自然やそこで生活を営む人との関わり、農林水産業

をはじめとした地場産業との関わりなどを通して、地域社会のために主体的・意欲的に取り組むことのできる人材の養成を目的にしています。

これは、社会に出てから役立つ各種の事柄を実践的に身につけることができるとともに、本学の「行学一如」という「建学の精神」の具現的取り組みともいえます。

◆新学年ガイダンス日に注意

在校生の新学年に向けてのガイダンスが3月27日に新4年生、28日に新3年生、29日に新2年生ガイダンスがそれぞれ実施され、また、27日から在校生Web登録が可能となります。これらの内容や日程の詳細は、各自確認しておくことが重要です。

福祉実習支援室

福祉実習支援室では、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、介護職員初任者研修、レクリエーションインストラクター、スクールソーシャルワーカー等の資格取得のための支援を行っています。社会福祉士、精神保健

福祉士の国家試験のための受験対策講座も開設し、資格を活かした職業に就けるよう就職活動と国家試験受験対策の両立のため支援しています。

一方、社会福祉援助技術実習の指導者要件には、社会福祉士実習指導者講習会の受講が義務づけられています。その講習会を12月2日（土）・3日（日）の2日間、宮城県社会福祉士の協力の下、仙台駅東口キャンパスで通信教育部との共催で開催しました。受講者は85名。来年度も社会福祉士を目指す学生の実習受け入れとご指導をお願いいたします。

教職課程支援室

今年度の教員採用試験は、約247名が受験し、一次試験合格者は157名、二次試験合格者は106名という結果でした。（1月17日現在）二次試験合格者が昨年度よりも19名増え、過去最多の合格者数となりました。

12月16日には、教員採用試験を受験した4年生による受験体験発表会を開催し、教員採用試験受験予定の1～3年生に向けて試験の内容や勉強方法のアドバイスをしていただきました。

実体験を聞くことのできる貴重な機会となり、多くの学生が参加しました。特に3年生にとっては、来年度の試験

に向けて対策講座等で勉強を開始していることもあり、4年生の体験談は大変励みになったことと思います。

来年度も多くの学生が採用試験を突破することができるよう、より一層の支援をしていきたいと思っています。

教育学部（子ども教育・社会教育学科が統合）

◆子ども教育学科・社会教育学科最後の卒業を祝う

平成27年度に教育学部に統合された子ども教育学科・社会教育学科に在籍する最後の卒業生を送ることにしました。今年は本学史上初めて教員採用試験の合格者が3ケタに載る106名を数え、本学の教員養成の実績を大きく塗り替え、有終の美を飾る形になりました。

教育学部では、両学科の歴史と伝統を受け継ぎ、1年次から教育現場に入る「教育実践活動」（小・中・特別支援学校）、卒業生と在校生がともに学び合う「TFU教育フォーラム」など、理論と実践の両輪を大切に魅力ある教育活動を数多く展開しています。

先行きの見えない社会を生きる子どもたちの育成のためには、本学で学んだ全てのことを活かして実践することが求められます。4月からの活躍を心から期待し、その門出を祝します。

健康科学部

高齢社会にある我が国では認知症の増加が著しく、2025年には700万人に達すると言われていきます。2015年の認知症施策総合戦略（新オレンジプラン）において、「認知症初期集中支援チーム」は2018年度から全ての市町村で実施されることになりました。

このチームは、認知症の人を医療や介護へ繋げるもので、医師の他に、保健師、看護師、作業療法士、介護福祉士などで構成されます。まさに、医療と福祉専門職の連携、融合が必須であり、本学の健康科学部のコンセプトに合致するものです。

健康科学部も創設以来12年が経ち、既に多くの卒業生が地域医療に従事しています。この3月、保健看護学科は9期生、リハビリテーション学科、医療経営管理学科は7期生が卒業しますが、認知症対策においても本学で学んだ成果を発揮してほしいと願います。

学生生活支援課

本学の学生団体は、体育会・文化会系団体ともに他大学と比べ加入率が高く、意欲を持って積極的に活動しているという魅力があります。

新年度になると環境の変化や進路などで悩むこともあると思いますが、課外活動でリフレッシュしたり、仲間悩みを相談することで気持ちが楽になると思います。また、人との関わりや活動を通して自己責任能力を高め、社会性を身に付けることもできます。

課外活動に興味はあっても入れずにいた学生も「いまさら」と思わずに、この機会に始めてみませんか？

大学ホームページに課外活動の活動内容や実績を掲載している他、4月上旬には学生主体で「サークル紹介」を開催する予定です。直接、学生の声が聞けるとあって毎年多くの学生が参加しています。ぜひ足を運んでみてください。

保健室から

大学生活というのは、それまでの学生生活とは大きく違った過ごし方が求められます。一人暮らしをスタートさせる学生さんも多くなります。履修についても、個人々々が講義を選択して時間割を組むという形になり、大多数の学生さんにとって初めての経験だと思っています。

また、高校までの学生生活に比べ、非常に自由度が高くなり、友人と過ごす時間や、アルバイト・ボランティア等の活動への関わりが増えることでしょう。自身の世界が広がる貴重な

ボランティア支援課

本学では1998年にボランティア支援課が学内に設置されました。以来、学生に向けて様々なボランティア活動を支援・推進しています。

設置当初は、年間のボランティア依頼件数297件に対して窓口を利用した活動者数が延べ593名でした。それが2017年度には依頼件数349件に対して学生活動者数は延べ2,194名となりました。依頼件数増加は地域との連携や知名度が上がったこと、また、約6倍に増加した学生の活動者数はボランティア活動に対する意識の変化と以前よりもボラン

な時期であり、とても幸せなことですが、その一方で、生活の変化や新たな刺激というのは、多かれ少なかれストレスとなるものです。

一人暮らしや友人との付き合いの中で食生活が変わり、体調にも変化が出

「誰かに話をしてみよう」

てきたり、精神的にも疲れが出てきたりするかもしれません。長いとも短いとも言える大学生活。充実して過ごしていたはずなのになぜ？ また、思ったように身体が動かない？ 等々、いろいろと考えられます。

ティア活動が身近になっているからではないでしょうか。

2018年度はボランティア支援課が設置され20年目を迎えます。今後も学生が主体的に活動できるよう、ボランティア活動の支援と推進を行っていきます。

キャリアセンター

◆【就職状況】

2018年3月卒業予定の大卒求人倍率は1.78倍と前年の1.74倍とほぼ同水準（+0.04ポイント上昇）を維持しています。企業の採用活動解禁時期となる広報活動は昨年同様3月より始まり、面接などの選考活動の解

体調が悪い時や落ち込んだ時は、なぜだかネガティブに考えやすいもの。そんな時、誰かに話をしたり、ちよつとしたアドバイスをもらったりするだけで、少し違った見方ができるようになるかもしれません。

そこで、何かお困りのことがありましたら、保健室にお越しください。

高校までの経験からも、「保健室」には馴染みのある方が多いのではないのでしょうか。希望に応じてカウンセラーの案内等もすることがありますので、どうしよう？ と思ったら、まずは保健室の存在を思い出してください。

禁が2カ月前倒しされた6月1日になってから、はや2年目となりました。3月の合同企業説明会から面接までの期間は短く「短期決戦」の様相が一段と強まりました。

採用活動の多様化が予想されることから、志望業界や企業の動きを注意深くチェックするよう学生にアドバイスしています。しかしながら、独自に早期採用を進める企業もあり右往左往する学生も見受けられました。また、面接・選考時期が集中したこともあり、学生のエントリリー数の減少や内定を取りながら納得できるまで就職活動する学生も多く、例年になく辞退率が高くなっています。大手企業でも採用予定数に達しない企業があり、中でも中小企業は長期戦を余儀なくされています。

福祉・医療分野の就職活動は福祉職の人材不足の影響から良い人材を早めに確保したい意思も絡み、特に福祉系企業（株式会社）はもとより法人系施設の採用活動の早期化が目立ちました。

医療施設では例年通り夏休み以降の選考が多く見られました。本学に対する求人数は2017年12月末で若干下回っているものの、就職内定率は1月末現在で前年度より上回っています。なお、就職先未決定者もあり、一人でも多く希望先に就職できるよう個人面

談の強化、さらに未決定者への電話連絡を通して、個々の状況を把握するなど卒業まで支援を行っていきます。

◆【情報収集の重要性】

就職準備期間が長くなったことにより、3年次の夏（6月～9月）・冬（12月～2月）に行われるインターンシップ（就労体験）も就職活動に影響力を増す傾向が見られました。2016年3月卒の就職活動スケジュールの変更に絡み、採用担当者からは「学生の企業・仕事理解が浅く不十分」といった懸念の声も上がっています。このため、キャリアセンターでは就職活動は3月からといっても、自分自身の仕事選びの軸を明確にしながら、それまでにしっかりと情報収集（自己分析・業界研究・職種研究・インターンシップなど）ができるようにサポートし、就職活動準備を徹底し、厳しい戦いを勝ち抜けるよう支援していきます。

公務員受験対策室

公務員受験対策室では、公務員を志望する本学学生の合格に向けて、必要な基礎学力の向上に取り組んでいます。平成29年度の合格者総数（実数）は80名でした。内訳は次の通りです。

国家公務員は札幌家庭裁判所調査官、法務省仙台入国管理局、法務省法

務教官、海上自衛隊に最終合格を果たしました。県庁は宮城県庁（行政・警察事務・学校事務・児童自立支援員・寄宿舎）、岩手県庁（社会福祉）、同（行政）、福井県庁（行政）に最終合格を果たしました。

市役所・都庁は、仙台市役所（福祉）、にかほ市役所（行政）、伊達市役所（行政）、盛岡市役所（福祉）、気仙沼市役所（社会福祉士）、登米市役所（行政）、多賀城市役所（行政）、調布市役所（社会福祉士）、大崎市役所（行政）、尾花沢市役所（行政）、宮古市役所（行政）、東根市役所（行政）、一関市役所（行政）に最終合格を果たしました。

警察は、宮城県警、山形県警、福島県警、岩手県警、警視庁に最終合格を果たしました。消防は、仙台市消防、長岡市消防に最終合格を果たしました。保育士・幼稚園教諭は、仙台市保育士、相馬市役所、白石市役所、川崎町役場、埴町役場、美里町役場、宮古市役所、二本松市役所、古殿町役場、新地町役場に最終合格を果たしました。

保健師は台東区役所、多賀城市役所、秋田市役所、福島県庁、仙台市役所に最終合格を果たしました。看護師は、仙台市立病院、山形県庁、大崎市民病院、栗原市立栗原中央病院に最終合格を果たしました。医療では、石巻市立

病院（社会福祉士）、横浜市立病院（理学療法士）、公立刈田綜合病院（理学療法士）、気仙沼市立病院（作業療法士）、公立刈田綜合病院（事務）、北村山公立病院（行政）に最終合格を果たしました。

町役場は、福島県埴町役場（行政）、飯豊町役場（行政）、松島町役場（行政）遠別町役場（社会福祉士）、大江町役場（行政）に最終合格を果たしました。



12月14日に風土で開かれた合格祝賀会

通信教育部

◆平成30年4月入学者募集開始

平成30年1月10日より新年度4月入学者の募集を開始しています。社会福祉学科では、我が事・丸ごと地域共生社会政策に絡み、平成32年からの社会福祉士・精神保健福祉士指定科目変更に合わせて学生が受講しやすいカリキュラム改正を目指し準備を進めています。

ます。福祉心理学科では、公認心理師の資格取得コースが今後導入できないか、検討を進めています。

また、学生向けポータルサイトの充実を図り、平成30年度より履修状況Web閲覧及びスクリーニング申込のスマートフォン対応の運用が開始され、在宅での学習環境がより向上することになります。

「幼保特例講座」及び「教員免許状更新講習」は本年度も引き続き開講いたします。詳しくは、通信教育部ホームページをご覧ください。



図書館

◆推薦図書を表示しています。

図書館3階の特設コーナーに講義を担当する先生方や各学科から推薦された各種資料を展示しています。

これらは、講義に関連したものはもちろん、教養向上のために在学中に一度は読んでみてもらいたいという資料も含まれています。『LRT:次世代型路面電車とまちづくり/宇都宮浄人、服部重敬共著』や『フランク・ロイド・ライト/ブルース・ブルックス・ファイファー文』『『Miyake Issey展』三宅一生の仕事/岩崎寛撮影』国立新美術館、三宅一生デザイン文化財団、求龍堂編集』などの建築

やデザインに関連する資料もあります。

ぜひ一度、図書館に足を運んで、書を眺めてみてください。きっと参考になる資料が目に見え込んでくると思います。



国際交流センター

国際交流センターは、学生・教職員の国際交流を支援し、大学における多様性育成や国際化に寄与するため、交流事業や海外研修の運営・支援を行っています。

【学術交流】海外協定校との人的交流プログラムによる相互受入・派遣（フィンランド）、社会福祉、ICT、ロボティクス、リハビリ、ヘルスケア分野での海外研究者との学術交流、外国人介護人材育成支援、JST「さくらサイエンス」プログラムでのミツバチ科学分野での学術交流事業等を行っています。

【学生海外研修・交換留学】日中国交正常化45周年に際し、県主催の吉林省との交流事業で、中国・東北師範大学の関係者・学生51名と本学学生200名が文化・福祉分野での交流を行いました。本年度海外研修・交換留学は韓国・中国・英国・スロベニア・豪州・カナダ・ベトナムなど100名を超えました。



鉄道交流ステーション

仙台駅開業130年、仙山線全通80年、2017年は東北の鉄道にとって節目の年でした。当館では全通100周年記念「陸羽東線展」を開催。小牛田と新庄を結ぶ陸羽東線は、温泉郷として有名な鳴子地区を経由します。鉄道を敷設した当時、この辺りは地形が狭隘で難工事だったのですが、その貴重な工事写真のほか、路線で大活躍した蒸気機関車C58の雄姿、昭和20年代から走った週末列車や、様々なイベント列車の写真、ヘッドマーク、運行関係資料などを展示。1月27日には、眞船直樹氏の講演会を開催し、県内外から57名の聴講者が集まりました。



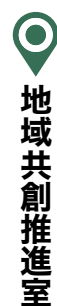
生涯学習支援室

大学の特徴と施設を生かした公開講座を企画し、一般県民へ学びの場を提供しています。また、社会人聴講生や履修証明社会人コースを設け、社会人学生の受け入れも行っています。

今年度は、社会人聴講生26名、延べ37科目と履修証明社会人コース異文化コミュニケーションコース2名を受け入れました。

仕事や生活時間を調整し、学ぶ姿勢そのものが現役学生の手本となり、一

方で社会人は学生から生きる活力を得て、互いに良い刺激を受けています。現在、次年度学生を募集しています。詳細は大学HP 生涯学習支援室まで。



地域共創推進室

国見・ステーションキャンパスを中心に半径1km圏内を地域共創の場に位置づけ、学生・教職員と地域住民のお互いの顔が見えるお付き合いができる日常的な取り組みを行っています。大学と地域が共に成長・発展できる環境づくりの構築のために、大学の持つ知的資源を地域に結びつけるコーディネート役割を担っています。

また、地域共創の架け橋、推進役として、学生・教職員・地域役員等で構成する大学指定団体「まごのてくらぶ」を発足させ、地域が抱えている課題の解決のために様々な地域支援活動を地域住民と一緒に取り組んでいます。

今後も民学官の連携を図り、地域に根差した大学づくりを充実させるために大学と地域が手を取り合い、地域共創社会の実現に向け、教育・研究・社会貢献が一体となった活動を実践していきます。



災害対策課

大学では周辺地域の防災力強化を目

的とした防災教育・訓練を実施・協力しています。

春に仙台観光国際協会、東北大学と共催し「外国人市民のための防災教室」を実施しました。多数の学生・教職員が参加。消火訓練や濃煙体験、心肺蘇生法・AED操作体験等の訓練を学生が中心になり、外国人住民の方々に指導を行いました。

秋には大学に隣接する三条中学校の中学生も参加しての防災訓練が行われ、学生、教職員が参加し、心肺蘇生法・AED操作使用訓練等の指導や消防署が行う訓練に全面協力しました。

また、本年度に災害時に妊産婦を受け入れる福祉避難所と帰宅困難者に一次滞在場所を提供する協定をそれぞれ仙台市と締結しました。

大学は地域の防災力強化と社会貢献に積極的に取り組んでいます。

入学センター

平成30年度入学試験は4学部9学科4専攻で実施しました。全体の募集定員は1,300名。定員変更に伴い、保健看護学科は10名増の80名になり、看護師・保健師に加え、新たに助産師資格を選択制で取得することができるようになりました。医療経営管理学科は10名減の70名です。

従来のAO入試、推薦入試、一般入試、センター試験利用試験に加え、新たに給付型奨学金入試を導入しました。

給付型奨学金入試は12月、本学を含め7会場で開催されました。募集定員は50名。3科目型（国語・英語・選択科目）の入試でした。合格者は授業料の後期分が給付される形の免除になり、返済の必要はありません。合格者の中には、AO入試・推薦入試の入学予定者も含まれていました。

本学ホームページ「入試情報」では、募集（入試）要項の公開、インターネット出願サイトの開設など、最新の情報を提供しています。

成道会

法要を営む

涅槃会

12月8日、国見キャンパス法堂で成道会（じょうどうえ）が営まれました。釈尊が悟りを開いたとされる日をお祝いする法要です。齊藤仙邦教授が導師となり、仏教専修科の教職員、学生らも参列しました。



齊藤教授は「われわれはお釈迦さまの教えをしつかり伝導していかないとけない。そのためには一つ一つ修行していこう」と法話で説きました。

映像作家M・グロス氏が工芸館を来訪

カナダ出身のマーティ・グロス氏は1970年に初来日、40年以上に渡り日本の民藝運動に関する映像や音声などを収集・保存してきました。79年に監督した映画「文楽 冥途の飛脚」はデジタルリマスターされて2011年に国内初公開され、反響を呼びました。

民藝運動とは、柳宗悦らが中心となり、日本の庶民の暮らしの中で扱われてきた日用品に美を見いだし、世界にその価値を知らしめたものです。その



コレクションを見て回るグロス氏（左）

託されたフィルムをのみならず、日本に眠る映像資料を掘り起こしながら、民藝運動を確かな記録として後世に残すためにフィルムを修復し、関係者らのナレーションを吹き込み、デジタル化していく「民藝運動フィルムアーカイブ」に取り組んでいます。

この日は、宮城県民藝協会の白鳥幸昌事務局長とともに訪問。民藝運動の一端を担った芹沢の作品や、展示中の「芹沢銈介コレクション インドネシア 島々の緋（かすり）」で所蔵品の数々に目を凝らしました。アーカイブの資料となるものをじっくりと見た上で、芹沢らが写るフィルムがないか、など当館学芸員に取材しました。

2月15日、国見キャンパス法堂で涅槃会（ねはんえ）が営まれました。釈尊が亡くなられた日とされる日に偲ぶ法要です。大谷哲夫学長が導師となり、仏教専修科の教職員、学生ら約20人が参列しました。解説を川村昭光講師、維那を今春、卒業する天野大芳さんが務めました。法話で大谷学長は前年に亡くなられた方が遺した3つの遺偈（ゆいげ）を披露しました。



年

芹沢銈介美術工芸館

インドネシア島々の絨展

2017年10月3日から2018年2月1日まで、当館は企画展「芹沢銈介コレクション インドネシア島々の絨(かすり)」展を開催しました。絨は、あらかじめ糸を染めてから布を織り上げる染織技法の一種で、かつてインドネシア全域で作られていました。日常着として着用されたほか、儀礼・祭礼でも重要な役割を果たしていました。現代ではその技法と伝統が失われつつあります。今回は、スマトラ島やバリ島、スンバ島など9つの島の絨を約60点紹介。多くは2mを超える



スンバ島の絨について解説する学芸員

長大な染織品ですが、精緻な模様で構成されているため、じっくりと鑑賞する来場者の姿が印象的でした。併設展として、芹沢

銈介の装幀(そうてい)や、初代館長・芹沢長介が集めたそば猪口(ちよく)も展示。ワークショップ「ティーマットにそば猪口模様を染めてみよう」や、全5回のギャラリートークなど、関連イベントも多数行いました。

恒例の型絵染講習会

10月15日には、芹沢の弟子で、土手染色工房を主宰する土手武彦氏と土手千鶴子氏が講師に招き、恒例の型絵染講習会を開催。参加者10名が、大小二



干し場の作品

つのトートバッグやハガキを染めながら、型置きや色さしの技法を体験しました。

12月にはS M M A(仙台・宮城ミュージアムアライアンス)加盟館として、せんだいメディアテークで行われたイベント「ミュージアムユニバーサルすてき・ふしぎ・おもしろい」



第1期の展示風景

に参加。芹沢銈介のライフワークだった型染カレンダーについてパネル展示したほか、ミニサイズのカレンダーを作るワークショップの開催、トークイベントへの参加など、当館の魅力を発信しました。

今年の1月24日からは、仙台駅東口キャンパスのTFUギャラリーミニモリで、第1期「ミニモリで新春おみくじ〜人間国宝・芹沢銈介の吉祥文様〜」展を開催。期間中は、おめでたい文様や漢字をあしらったオリジナルおみくじを設置し、来場者とともに一年の福を願いました。

第2期「ミニモリでひなまつり〜五段飾りと雛絵図〜」展では、芹沢が初孫のために制作した《雛絵図》や京都丸平の五段飾り等が並び、日本の伝統的な行事のひとつである桃の節句を楽しんでいただきました。ワークショップは、「貝根付を作ろう」と題して、週3回開催しました。

なお、4月9日から6月30日まで「芹沢銈介・暮らしに活かすデザイン」を当館(国見)で開催する予定です。皆さまのご来館をお待ちしております。

昨年を2つ上回る16位に躍進

第35回全日本大学女子駅伝(杜の都駅伝)



第1中継所で須藤からタスキを受け取る古川(右)

第35回全日本大学女子駅伝対校選手権大会(通称・杜の都駅伝、6区間38km)が10月29日、仙台市内で行われ、11年連続15度目出場の本学は2時間10分56秒で昨年より順位を2つ上げ、16位となりました。

2年前の過去最高14位には届きませ

んでしたが、台風接近による雨の中、選手それぞれが持ち味を発揮し、来年の東北地区の枠を1つ増やし2枠としました。

今年のインカレで5,000m5位になった1年生、須藤ひかる選手を1区に起用。悪天候なども影響したのか本来のスピードを出しきれず、17位からのスタートとなりました。

2区で18位に順位を落とすも、3区、今年の日本選手権3,000mSCで9位の工藤レイラ選手が区間10位の走り、16位に引き上げました。4区で再び18位と順位を落としましたが、5区の鈴木美咲主将、最終6区の尾関真衣選手がそれぞれ区間9位で1つずつ順位を上げ、16位でフィニッシュしました。

鈴木美咲主将「目標が高かっただけに悔しさが残りますが、全員が今出せる結果を



力走した選手(前列)と力を合わせたメンバー

出しての結果だったと思います。(最長区を走り)順位を1つ上げたので、5区の仕事はできました。来年はみんなのびしろのある選手なので、きょうの反省を生かして、シード(8位以内)をめざせるようにしてほしい」。

陸上競技部・冠木雅守監督「4年生はさすが、思いもあつたので力通りの走りをしてくれました。全体的に集団で(タスキを)持たせたかったけど、僕の力不足。選手の力を出してあげる

ことができなかった。(各選手の)スピードは速くなっているけど、強さが必要。心も体も強い選手をこの1年でつくらないと、また同じ結果になってしまう」。

《総合成績》

1位 名城大学 2時間5分15秒
2位 大東文化大学 2時間5分50秒
3位 立命館大学 2時間6分46秒
16位 東北福祉大学 2時間10分56秒

《本学選手の区間成績》

※タイムの後は区間順位

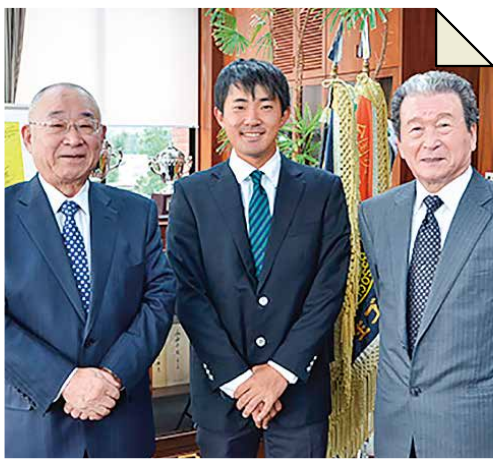
1区(6・4km) 須藤ひかる(看護1年) 21分50秒(17)
2区(5・6km) 古川 恵里(教育2年) 19分04秒(18)
3区(6・8km) 工藤レイラ(看護4年) 23分02秒(10)
4区(4・8km) 鈴木 菜々(社福3年) 17分21秒(18)
5区(9・2km) 鈴木 美咲(福心4年) 31分39秒(9)
6区(5・2km) 尾関 真衣(医経3年) 18分00秒(9)

国内最高峰の日本オープン2位

金谷選手が大谷学長に報告

2017年度（第82回）日本オープンゴルフ選手権競技（10月12日～15日、岐阜関カントリー倶楽部東コース、7180ヤード、パー70）で2位となり、自身2度目のローアマチュアを獲得したゴルフ部の金谷拓実選手（社福1年）が10月18日、国見キャンパスで大谷哲夫学長、大竹榮副学長に成績報告を行いました。

男子ゴルフ国内最高峰の大会を戦った金谷選手は、3日目、4日目とスコアを伸ばし、4日間通算7アンダー（273）。1打差の8アンダーで優勝



左から大谷学長、本人、大竹副学長

したのは2007年度卒の池田勇太選手で、この大会の本学関連選手による「優勝&ローアマチュア」は、昨年の松山英樹選手（優勝）と比嘉一貴選手（社福4年）に続いて2年連続となりました。

報告を受けた大谷学長は、1927年第1回大会の赤星六郎以来、90年ぶりのアマチュア優勝にあと一步と迫った金谷選手に対し「苦労さま。よくやった」とねぎらいの言葉をかけました。

金谷選手は「力以上のものを出せたという満足感と、あと少しだったなという悔しい気持ちと半々です」と振り返りました。先輩の池田選手との最終日最終組でのプレーには「日本でトップの選手。勝負どころのアプローチとか、たくさん勉強ができました」と話しました。

今後に向けては「世界に通用する選手になりたい。まだ体が小さいので今は体をつくることに力を入れたい。体重も筋力も増やせば、できることの選択肢は増えてくると思います」と自身を冷静に見つめていました。

プロ野球ドラフト会議

楠本選手横浜、笠井選手巨人に指名

10月26日に東京都内で行われたプロ

野球（NPB）ドラフト会議で、本学硬式野球部の楠本泰史内野手（情マネ4年）が横浜DeNAベイスターズから8位指名、笠井駿外野手（情マネ4年）が読売ジャイアンツから育成3位指名されました。

楠本選手は埼玉・花咲徳栄高出身。巧みなバットコントロールが持ち味で、本学では1年春からレギュラーを獲得し、3、4年時には侍ジャパン大学代表に選出。17年7月の日米大学野球では首位打者賞を獲得し、8月のユニバーシアードでは4番として優勝に

貢献しました。

東京・国士館高出身の笠井選手は、身体能力に優れ、走攻守三拍子そろい、3年時の全日本大学選手権ではレギュラーとして8強入りに貢献しました。

楠本選手（「指名されるか」最後まで不安だったので指名していただいて光栄に思っています。地元で小さい頃から応援していたので親近感がわく球団です。日々勉強と思い、周りの選手すべてをお手本として少しでも野球がうまくなるようにやっていきたい」。

笠井選手「育成選手ということで、しっかりと世話になった方々と相談して決めたいが、入ることになれば支配下も育成も関係なくやっていきたい。右投げ右打ちの外野手なので、長野さんや石川さんのように打てる外野手として活躍したい」。

大塚光二監督「楠本はバットコントロールが素晴らしい。大学に入って足も速くなったので、その打撃と足をアピールしてほしい。笠井は試合を重ねる環境になれば、伸びていくタイプだと思います」。



指名された楠本選手（右）と笠井選手

吹奏楽部「第40回記念定期演奏会」と

祝賀会を盛大に開催



挨拶を述べる堀江部長

クリスマスの

12月25日、吹奏

楽部第40回定期

演奏会が仙台市

の東京エレクトロンホール宮城で開かれ、市民、学生、教職員ら約500

人が訪れました。3部構成のオープニ

ングはマーチ「一度っきりの人生」で、

仙台フィルハーモニー管弦楽団のトロ

ンボーン奏者で当部の音楽監督を務め

る松崎泰賢氏が、続いて序曲「祝典」

など3曲を学生が指揮しました。

2部では、卒業生42人が加わり、作

曲家の八木澤教司氏を客演指揮に招

き、同氏が作曲した委嘱作品から「ひ

と夏の恋」、「ファセクラ」の2曲が演

奏されました。八木澤氏には、10年前

の第30回定期演奏会で新作を委嘱して

以来、10曲の作品を作曲していただい

ています。3部ではその中から、記念

すべき1作目の「散歩、日傘をさす女

性」を含む4曲が披露されました。

アンコールでは、松崎氏のトロン

ボーン演奏やクリスマスソングが披露

され、盛大な拍手に包まれました。



OB・OGも参加した豪華な定期演奏会

また、12月9日、学食「風土」で「第

40回記念定期演奏会祝賀会」が開催さ

れ、卒業生23人をはじめ、現役部員、

教職員ら約100人が出席しました。

開会式で堀江謙一部長が「40年を一

つの節目にして、さらに発展させたい」

と抱負を交えながらあいさつ。祝辞で

は東北吹奏楽連盟の木村仁彦事務局長

に続いて、元部長・畠山英子教授が「青

春時代に打ち込んだことがあると歳を

取ってから思い出す。今を大切に」と

現役部員を激励しました。

前部長の広

浦幸一准教授

が乾杯の音頭

を取り、現役

部員約40人が

松崎泰賢氏の

指揮で「ギャ

ンパス・マー

チ」ほか2曲

を記念演奏

し、華を添え

ました。

弓道部創部40周年記念祝賀会・

岡田清一先生師範就任祝を行う

弓道部創部40周年記念祝賀会並びに

岡田清一先生師範就任祝が2月10日、

OB、現役部員約120人が国見キャ

ンパスに集い、盛大に行われました。

1998年第22回全日本学生弓道

女子王座決定戦、2002年の第26

回同大会、99年第11回全国大学弓道選

抜大会女子と3度の日本一の実績があ

る弓道部。この日は40周年だけでなく、

90年から昨年3月まで部長を務め、現

在は大学院教育学研究科教授である岡

田先生の師範就任祝とあり、遠くは鳥

取、佐賀からもOBがお越しになる

など、盛会となりました。

師範となった岡田先生は「前任の溝

口（謙三）先生の後を継ぐのがとんで

もない重荷で、少しだけやろう、と思っ

ていたら30年近くになりました。その

間に日本一になる機会にめぐりあえた

のは、非常に幸運でした。創部15周年

の直前に3部に落ちた苦い思い出もあ

る。ただ、部や学校を辞めてしまった

学生のことが今でも頭に残っていて、

それを防げなかったのが残念だった

な、と今でもときどき思い出します。

いろんな思い出を与えてくださった体

育会弓道部に感謝したいと思います」

会は、鏡開きののちに乾杯、会食へ。

岡田先生への記念品贈呈もあり、さら

に盛り上がりしました。謝辞は現部長の

松本祥子准教授が務め「次は45周年の

前に全国優勝してもう一度集まれる機

会をつくりたいと思います」と述べる

と、閉会の辞では現役の渡邊雄真副将

（2年）が「日々努力を重ね日本一を

目指してこれから頑張っていきたいで

す」と力強く宣言しました。

最後に初代部員の松川弘さんが締め

の音頭を取ると、大きく鳴り響いた手

締めの音とともに笑顔が広がりました。



師範に就任した岡田先生（中央）を囲み鏡開き



「キャンパスと桜」をテーマにした「桜フォトコンテスト in 東北福祉大学」が昨年スタートし、一般市民を含めた18歳から84歳までの幅広い世代にわたる124名の方から、総数380点の作品が寄せられました。表紙の写真は見事、入選を果たした芳賀樹也さん(福祉行政3年)の作品です。裏表紙は「春」をテーマに、同時期に開催された学生フォトコンテストに入選した後藤僚太さん(社会教育4年)の関連記事11面Ⅱの作品です。

※財務情報は本学のホームページをご覧ください。